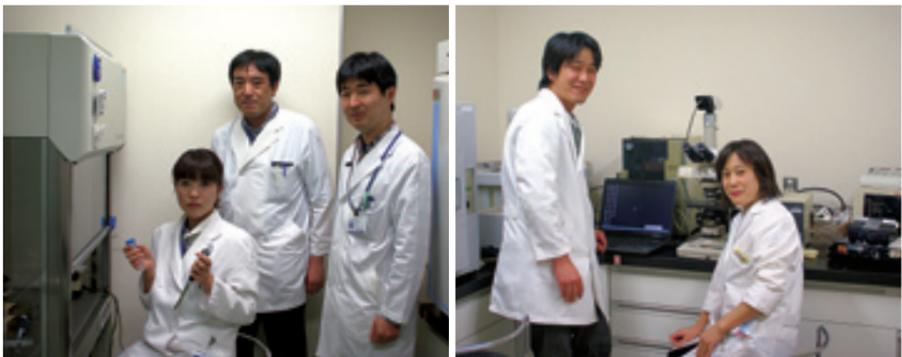


口腔科学の新たな分野に取り組み 臨床につながる研究を



専門的に分化する歯科の現場

私たちが病院に行くとき、まず考えるのは内科か外科かという受診する診療科です。そのために病院は病状に応じて様々な科に分かれています。その中で歯科といえ、基本的には虫歯や歯周病、義歯（入れ歯）などの治療が思い浮かぶと思います。しかし口腔内は歯だけではなく、歯ぐきや舌、粘膜などの様々な組織が存在するため、口内炎や舌の病気、感染症など、いろいろな疾患が発生します。さらに口は鼻や耳、食道にもつながっているわけですから、口の疾患が原因で全身的な疾患に広がることから、場所は小さくても大事な部位の一つです。

そこで近年、歯科において注目されているのが専門的かつ高度に進化するため、口腔外科的疾患を口腔内科と口腔外科に分けることです。徳大でも一昨年、全国で4番目となる口腔内科が誕生しました。

の開発。

六、転写因子NF-κBを分子標的とした口腔癌治療法の開発。

口腔内科の重要性は増すばかり

今回、研究室を紹介してくれる可児さんも、口腔外科から口腔内科の一員として、研究テーマのひとつであり、まだ治療法が見つかっていない難病のひとつの『シエーグレン症候群』という唾液が出なくなる病気の治療法・予防法の研究に取り組んでいます。これは自己免疫疾患と呼ばれる病気の種類です。本来、人の身体は細菌やウイルスなどに対してそれらを排除しようという免疫機構を持っているわけですが、何らかの原因で自分の正常な細胞や組織にまで攻撃を加えて病気を引き起こしてしまうものです。

「現在、動物を使ってメカニズムの解明や新薬の開発を行っています。が、なかなか大変です。でも私たちの研究が臨床の現場で役立てるよう、みんなで協力し助け合っていると思っています。」

シエーグレン症候群以外にも原因や治療法の解明されていないベーチェット病などの自己免疫疾



すでに大学病院でも口腔内科・口腔外科に分かれた治療を行っています。

同研究室では昨年4月に東雅之（あずままさゆき）先生を教授に迎えました。大学院生4名、あとは医員や講師・助教とまだ数少ないメンバーですが、新たな研究に意欲を燃やしています。

主な研究テーマは以下の通りです。

- 一、シエーグレン症候群唾液腺において、腺房構造を破壊するサイトカインをターゲットした抗サイトカイン療法の開発。
- 二、シエーグレン症候群唾液腺組織へのリンパ球浸潤機構の解析。
- 三、水輸送膜蛋白であるアクアポリンの導管細胞での発現誘導による水分分泌能付与療法の開発。
- 四、口腔粘膜疾患に対する神経伝達物質を用いた新規治療法の開発。
- 五、口腔顔面痛と自律神経活動の関連性の解析に基づいた治療法

患、神経疾患や血液疾患、舌痛症・歯科心身症など、小さな口の中でも病気はたくさんあります。また難病だけでなく、口は食物を摂るための大事な器官です。患者の口腔ケアや摂食・嚥下リハビリテーションなども口腔内科の大切な仕事です。

意欲ある仲間を大歓迎

温厚でジェントルマンな雰囲気
の東先生を中心とした同研究室。
「東先生は理性的な反面、医局会などはアットホームな雰囲気でも楽しいです。研究も自由にできる環境を大切にしてくれますが、肝心なところではしっかりと指摘して、大きな舵取りで適切な指導をしてくださって、とても頼りになります。」

「研究はしっかりと、しかし新入生歓迎会やお花見、ピヤガーデンなどことあるごとにコミュニケーションの場を作り、明るくほのぼのとした研究室です。新しい分野で、未知の研究が多いのですが、それだけにやりがいもありますので、新しい人にどんどん入ってきてほしいですね。」

と、可児さんたちは口腔内科の先輩として、後に続く人材に期待をかけています。

